

琉球大学学術リポジトリ

[原著] 沖縄県でみられたマンソン孤虫症の1例

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学医学部 公開日: 2014-07-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 長谷川, 英男, 大鶴, 正満, 幸地, 昭二, 松井, 克明, 野原, 雄介, Hasegawa, Hideo, Otsuru, Masamitsu, Kochi, Shoni, Matsui, Katsuaki, Nohara, Yusuke メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002016491

沖縄県でみられたマンソン孤虫症の1例

長谷川英男 大鶴 正満 幸地 昭二*
松井 克明** 野原 雄介***

琉球大学医学部寄生虫学教室

* 幸地胃腸科外科医院

** 琉球大学医学部第1病理学教室

*** 那覇市立病院検査科

マンソン孤虫症(*Sparganosis mansonii*)は、マンソン裂頭条虫 *Spirometra erinacei* の幼虫形(プレロセルコイド *Plerocercoid*)であるマンソン孤虫(*Sparganum mansonii*)の寄生によっておこる人畜共通寄生虫疾患である。沖縄県では本症の症例が少なく、これまで石川(1955)¹⁾の1例が知られているのみである。著者らは最近、本症の1例を見出したので報告する。

症 例

患者：M. Y., 34才，女，那覇市在住。

主訴：左大腿部内側のしこり

現病歴：昭和55年11月，湯上りに左大腿部内側に無痛性のしこりがあるのに気づいた。翌日受診したが，良性脂肪腫と思われたため，切除等は行なわれなかった。その後しばらくして，その腫瘍が皮膚表面に近づいたように感じ，またその部位の皮膚が発赤したり，薄青色となったりし，更に痒痒感も伴って来たので再来院した。

手術時所見：左大腿内側皮下に柔軟なバリックス様腫瘍を触れる。脂肪腫を疑い，切除手術を施行(昭和57年2月20日)。摘出した腫瘍は，外見的には脂肪腫様であったが，念のため病理組織検査に付した。

病理検査所見：材料は5×1.5×1.5cm大と2.8×1.5×1cm大の黄色組織塊であった。組織学的にはいずれも脂肪組織で，1ヶ所に寄生虫の断端がみられ(Fig. 1)，周囲にリンパ球や好酸球の浸潤がみられる。他の1ヶ所には虫体が

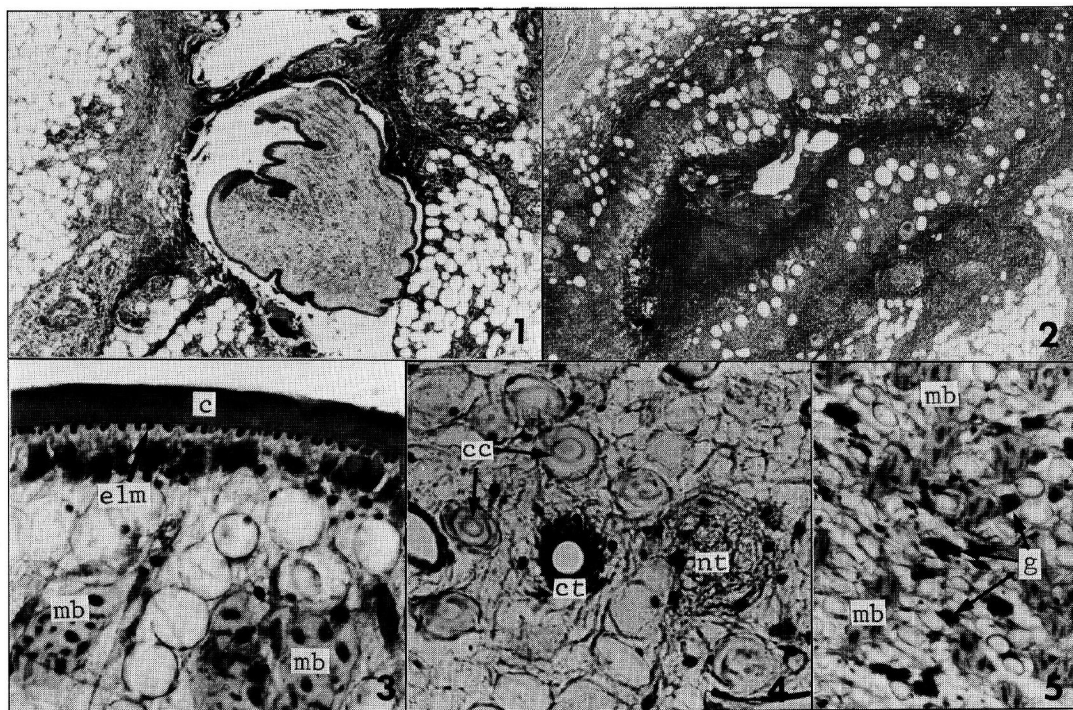
通過した痕跡を思わせる壊死巣を伴った肉芽腫の形成がみられる(Fig. 2)。

虫体所見：虫体断端は不規則な輪郭を有し，大きさは1.3~1.5mm×1.2~1.5mm，虫体外表は厚い角皮(cuticle，厚さ7~16 μ m)でおおわれ，その表面は光顕的にはほぼ平滑で，微小毛(micro-triches)はみられない。角皮の内側には一層の筋線維(表皮縦走筋epidermal longitudinal musculature)が並び，その内側にヘマトキシリンに淡染する細胞質と，濃染する円形核を有する細胞が1~2層に並ぶ(Fig. 3)。それより内側は濃染する核が散在した，ほぼ均質の柔組織で占められ，その中には円~楕円形の石灰小体(calcareous corpuscle，径8~13 μ m)が多数存在し，筋線維束も随所にみられ，排泄管も多数分布している(Figs. 3, 4, 5)。また腺様構造も散見される(Fig. 5)。虫体中央左右には，太く，壁が厚い集合管がみられ，その外側に縦走神経幹がある(Fig. 4)。消化管はなく，発達した生殖器官も認められない。

考 察

今回得られた虫体は，石灰小体を有すること，消化管を欠くこと，内部がほとんど柔組織で占められること等により，条虫類であることは明らかである。また，発達した生殖器官を欠くこと，組織内に寄生していたこと等から幼虫であることが知られる。

条虫類の幼虫のうち，孤虫(*Sparganum*)，囊尾虫(*Cysticercus*)，共尾虫(*Coenurus*)，包虫



- Fig. 1. Pathological tissue section of the tumor showing a cestode larva surrounded by numerous lymphocytes and eosinophils. X 20
- Fig. 2. Granuloma with necrotic changes around a cavity which was supposed to be made by the migration of the worm. X 20
- Fig. 3. Tegumental region of the cestode larva showing cuticle (c), epidermal longitudinal musculature (elm) and parenchymatous muscle bundles (mb). X 400
- Fig. 4. parenchyma of the cestode larva. Calcareous corpuscles (cc), collecting tube of excretory system (ct) and longitudinal nerve trunk (nt) are observed. X 400
- Fig. 5. Gland-like structures (g) and muscle bundles (mb) scattered in the parenchyma. X 200

(*Echinococcus*) が人体に寄生することが知られている。後 3 者は嚢胞状の組織を形成し、しかも角皮がガラス状で層状をなす(包虫)か、角皮表面に明瞭な微小毛を有する(囊尾虫、共尾虫)ので、今回のものとは区別される。一方孤虫は中実の体構造を有し、角皮表面には光顕的に微小毛がみられないこと、柔組織内に筋線維束が散在すること等の形態を有し、今回の虫体に一致する。人体寄生の孤虫として、マンソン孤虫(*Sparganum mansoni*) と芽殖孤虫(*S. proliferum*) が知られているが、今回の虫体は、

形態的にも臨床的にも芽殖増殖する傾向は認められないので、マンソン孤虫と同定される。

マンソン裂頭条虫の成虫は主として犬、猫の腸管に寄生し、産下された虫卵は水中で孵化してコラシジウム *Coracidium* となり、これがケンミジンコ類に捕食されるとその擬体腔へ侵入してプロセルコイド *Procercoid* となる。次いでこのプロセルコイドを宿したケンミジンコが両生類、爬虫類、鳥類、哺乳類等に摂取されると、発育してプレロセルコイドとなり、終宿主に摂食される機会を待つ。人体への感染経路は(1)プレ

ロセルコイドを有するカエル、ヘビ、ニワトリ等の生食、(2)プロセルコイド寄生ケンミジンコの混入した飲料水の摂取、(3)稀には民間療法としてのカエル肉、ニワトリ肉などの外用貼付などが知られている²⁾。今回の患者の場合、カエル、ヘビ等を食したことはなく、また肉類は余り好まず、生食などは全くしたことがないという。一方、患者宅では飲料水には水道水を利用しており、また肉類の外用貼付も経験していない。従って本例の感染経路は今のところ全く不明であるが、患者がかって何らかの機会に、偶然にプロセルコイドを有するケンミジンコを摂取するなどして感染を受けたものと考えられる。

マンソン孤虫症は日本々土では時々経験される疾病で、毎年数例ずつ報告されている。日本における213例を集計したものでは、寄生部位は下腹臍径部(35例)、腹壁・腹腔(35例)、眼部(29例)、胸壁・胸腔(28例)の順に多く、今回のような股部は22例で5番目となっている。³⁾一方、沖縄県においては、これまで石川(1955)¹⁾が眼球結膜から取り出した1例が報告されているのみであって、極めて稀な疾病といえる。沖縄県の犬、猫の寄生虫調査(安里、長谷川、1982⁴⁾)で、マンソン裂頭条虫成虫の寄生は見出されなかったが、沖縄本島各地で採集したヘビ、カエ

ルにはマンソン孤虫の寄生が認められており(長谷川、未発表)、本条虫が分布していることは明らかである。

ま と め

沖縄県那覇市在住の女性(34才)の左大腿内側に形成された皮下腫瘤を切除し、その病理組織切片中に寄生虫断端を見出した。虫体の形態学的検索の結果、マンソン孤虫と同定された。本例は沖縄県で確認されたマンソン孤虫症としては2番目のものである。

文 献

- 1) 石川敏夫：結膜下に寄生せるマンソン孤虫の一例。沖縄医学会誌。3(1), 70-72, 1955.
- 2) Faust, E. C., Russell, P. F., Jung, R. C.: Clinical Parasitology, 8th ed., Lea & Febiger, Philadelphia, 890 pp., 1970.
- 3) 加茂甫：条虫類。臨床寄生虫学，第2版(大鶴正満編著)，南江堂，東京，161-214, 1982.
- 4) 安里龍二・長谷川英男：沖縄県における犬、猫の寄生虫調査。寄生虫誌，31(補)，60，1982.

A Case of Sparganosis Mansonii Found in Okinawa Prefecture, Japan

Hideo Hasegawa, Masamitsu Otsuru, Shoni Kochi *
Katsuaki Matsui ** and Yusuke Nohara ***

Department of Parasitology, School of Medicine, University of the Ryukyus

* Kochi Clinic

** Department of First Pathology, School of Medicine, University of the Ryukyus

*** Department of Central Laboratory, Naha City Hospital

A 34-year-old woman was admitted with complaints of a subcutaneous tumor in the inner side of the left thigh which had persisted for about one year. A cestode larva was detected in the tissue sections of the tumor removed surgically. Morphologically, the worm was identified with *Sparganum mansonii*. This is the second case of sparganosis reported in Okinawa Prefecture, Japan.